

# 広郷土史研究会

## 会報

第120号

事務局 広まちづくりセンター内  
〒737-0706 広島新開2丁目1-4  
電話(0823)71-0706 FAX 73-5034  
発行 平成26年7月15日  
広郷土史研究会編集委員会

### 広甘藍 (かんらん) 集荷状況



明治中期から栽培されていた広村の甘藍は大正初期に玉木伊之吉を中心とした数名の篤農家によって品種改良が行われ広村野菜生産の主流を占めるまでに生産が拡大され村産業に多大の貢献をした。写真は野菜出荷組合に集められた甘藍でこの後、俵に詰められ貨車で関西方面市場に送られていた。

(写真と文、上河内 良平)

#### 目次

2014年度芸備地方史研究大会のご案内	同会大会委員	笠井今日子・・・2頁
広甘藍事始め再考	広郷土史研究会	上河内良平・・・4頁
藤田家文書解説 第FJ章 入船山記念館所蔵文書(その4)		古文書部会・・・16頁
例会報告・事務局報告		吉田顕治・・・17頁

# 広甘藍事始め再考

上河内良平

## はじめに

広甘藍については当会会報第 119 号で小栗康治氏がこれまでの集大成とした論考を詳細な資料を使って発表された。この論考に異論をはさむつもりはないが、この論考は明治 37 年以降大正初期の広甘藍品種改良以後の内容である。現在郷原農業試験場には「呉市農林水産課」が『広甘藍一件綴』と表題を入れた甘藍に関する膨大な資料（A 4・300 頁余）が現存する。この資料には明治中期から甘藍は広村で栽培されていたと記されている。しかし同氏は「同会報 p 9」でこの資料に触れているにもかかわらず冒頭部分を紹介しただけに止めて詳細を検討した形跡がない。

そこで筆者は触れられなかった明治 37 年以前の甘藍事情をこの資料と広村明治期役場文書を使って論を加えたい。

それは小栗氏が使用した諸冊子に記述されている事だけでは本質を見極められないと危惧し、敢えてこの『広甘藍一件綴』の文章の意味・行間を探っておきたい。

これと同時に広甘藍が戦後、再生産を試みるもやがて消滅していく過程も述べる。

## 『広甘藍一件綴』の内容

広甘藍の最盛期は大正中期～昭和初期で作付面積 200 余町歩。生産高約 200 万貫。大正 3 年（1914）玉木伊之吉が栽培農家に呼びかけ、450～60 軒からなる「広村園芸出荷組合」を設立し、広村蔬菜の代表になっていたが、昭和 13 年（1938）後まもな

く戦端（太平洋戦争）が開かれる。第十一海軍航空廠など軍事上の要衝地であった広の町は工廠工員の宿舍設営のため次第に耕地が浸蝕され、且つ主食（米・麦）増産上、甘藍の生産は振るわなくなった。

このようにその生産は衰微し、品質も端境蔬菜としての優秀性を失い多年の労苦が水泡に帰した。

戦後昭和 21 年には、その栽培面積は約 3 町歩であったという。よって、伊之吉の設立した組合は解散に至った。

しかるに戦後食料事情の好転により次第に広甘藍への関心が高まり順次増反され、昭和 24 年度には約 10 町歩、10 万貫が生産され、昭和 25 年度には再び山本廣により「呉市蔬菜出荷組合」が新設され約 15 町歩、15 万貫に達し、同年より京阪神への出荷が始められた。昭和 26 年度には約 25 町歩、25 万貫を生産し、京阪神の市場視察も行われる。

さらに広島県の協力の下強力な諸施策が呉市の後援と共に行われ、

- ①、採種圃による品種改良
- ②、育苗圃による優秀苗の普及
- ③、市場拡張のための諸施策

により昭和 27 年度に於いては新期の目標、栽培面積、30 町歩。生産高、30 万貫を達成する。戦後初めて京阪神への多量出荷を実現した。

昭和 28 年度には増産運動を広く推進し、

作付面積、38町歩。総生産量、38万貫の実績を収めた。

昭和29年度には多額の県費補助を受け、採種・選抜事業を強化し販路拡張の推進を押し進めた結果、生産面積、50町歩。総生産量、50万貫に達した。

昭和30年度にも県費の補助を仰ぎ広島県農業試験場可部園芸支場長松田栄氏の協力の下、同34年までの5ヶ年計画を立て、大正期の最盛期に匹敵する栽培面積200町歩（呉市内100町歩・隣接町村100町歩）を目指したが、昭和31年度の掲載記事を最後に資料は終了する。

つまり広甘藍復活計画は同31年以降、頓挫したと推測される。この理由は広町農地の住宅地への地目改編が進み急激に都市化が進んだ為と考えられる。

以上が『広甘藍一件綴』の主たる内容である。

筆者がこの資料で注目したのは、昭和26年度～同31年度までくり返し資料冒頭で記されている「広甘藍の沿革」の項である。この記述された沿革の信憑性は同資料を公文書として理解すべきと考え、以下でこの性格を検証する。

#### 『広甘藍一件綴』の資料的性格

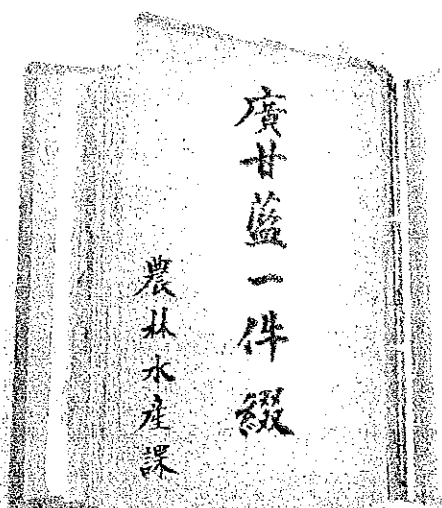
この資料に記述者名の記載はないが、昭和26年から広甘藍復活のために呉市農林水産課に事務局を設け、呉市長松本賢一（農林水産課扱）により広支所長・農業協同組合長宛てに「広甘藍増産計画について」と題する文書（昭和31年5月9日最終年度）を提出しておりそれまで同26年度から毎年種蒔き前に会議を開催して記録を残している。

よってこれらは会議に参加した数十名の農業従事者または「呉市広甘藍立毛品評会出品者53名（昭和31年度）」の会議場での意見を聞いた広支所農林水産課吏員が記録を取り関係者に徹底を図るため作った資料の控えであり、記述者は同課職員の一人と推測される。

農業従事者は目録一番から神谷米吉・矢口勇次郎・玉木二郎・住吉茂夫・西木虎吉・山根新助・桑本巳之助・重本年人・桧垣仁一・玉木英三。10番まで残り40名ほどであった。（40名余は筆者省略）

広甘藍復活活動に参加した人物中に名前の記載はないが、この活動に玉木伊之吉が有る程度の助言をしていたと思える。

それは昭和29年10月1日付・呉市長松本賢一よりの表彰状「広甘藍の栽培に心血を注ぎ現在の優良種の結実に成功し全国にその名をひろめられる等農事の改良に貢献され郷土産業に多大の功績をいたされたことを認め・・・」という表彰状を受けていることからである。（注1）



郷原農業試験場に保管されている『広甘藍一件綴』

また玉木伊之吉が昭和 29 年 (1954) 呉市長より甘藍栽培貢献により表彰される 50 年前の明治 37 年 (1904) 当時、伊之吉は満、38 才であった。

明治中期が広村での甘藍栽培の初めてであると記載された『広甘藍一件綴』の内容は同氏の意見なども聞いて記述されたものと考えられる。この明治中期の学術的年代区分は明治 22 年～同 37 年とされ同氏は 23 才～38 才であり、伊之吉など明治中期にすでに蔬菜を栽培していた当事者からの聞き取り記述であったと考えられる。よって広村でこの頃、甘藍の栽培が行われていたと断定する事が可能である。これがこの資料の性格である。次に沿革の内容を検証する。

#### 『広甘藍一件綴』記載の甘藍の沿革 (明治中期、広村甘藍栽培の根拠)

①. 昭和 26 年度：呉市広町に甘藍栽培し始めたのは不詳であるが、日露戦争当時 (明治 37 年) には既に相当栽培されて多量に生産していた。当時農家は自ら広島市天満町市場に出荷していたが、当時の甘藍調理法は非常に幼稚で商人は之を茹でた後、乾燥して販売したということである。

広甘藍の前身はサクセッションであるがこれは耐寒性に乏しく又輸送に於いて毀損の弊に流れやすいため・・・。(中略)

当時名称を広島甘藍と名付けていたが昭和の初期に至り広甘藍と改名。(後略)

②. 昭和 27 年度：呉市広町に甘藍を栽培し始めたのは不詳であるが明治 27・8 年頃から相当生産されていたが、その品質は極めて欠点多く市場価値が低く取るべきものでなかったが広町農家の献身的努力により次第に品種が改良され・・・。(後略)

③. 昭和 28 年度：当町に甘藍を栽培し始めたのは不詳であるけれども日露戦争当時 (明治 37 年) には・・・(後略) 以下は①と同文。

④. 昭和 29 年度：広甘藍栽培の起源は明治中期頃にして当初はその品質悪く市場価値が極めて低かったが其の後生産農家の多年の努力により品種の改良が行われ生産が増強し大正初期には漸く市場に於いて好評を得たので生産農家は激増し最盛期の大正末期に於いてその栽培面積 200 有余町歩に達し・・・。(後略)

⑤. 昭和 30 年度：広甘藍の栽培の起源は明治中期頃にして当初はその品質悪く市場価値が極めて低かったが其の後生産農家多年の努力により品質の改良が行われ生産が増強し大正初期には漸く市場に於いて好評を得たので・・・。(後略) 以下④とほぼ同文。

⑥. 昭和 31 年度：この年度が最終年限で記述も集約的であるため全文を記載する。

#### 1. 沿革

広甘藍の栽培起源は明治中期で当初はその品質も悪く市場価値が極めて低かったが、その後生産農家の多年の努力に品質の改良が行われて大正初期に至ってはじめて市場の好評を得るものとなり次第に栽培面積も延びてきた。最盛期の大正末期に於いては、その栽培面積は 200 ヘクタール以上に達し生産量は 200 万貫を超えて東京・大阪・九州は無論遠く大連にまで出荷した盛況振りであった。

然るに昭和 12 年より軍事施設の拡張により耕地が潰れる一方食料増産の施策により広甘藍の生産は振るわず終戦時には僅かに 3 ヘクタールに止まり、全く火の消えた状態となった。

その後、昭和 24～25 年頃より食料事情の好転と共に生産出荷組合を中心に品種改良を行う一方増産に不断の努力を傾けた結果、昭和 27 年に至り所期の目標 30 万貫の生産に達し戦後初めて京阪神に多量に出荷しその品質が高く評価され生産者の増産意欲も高まり昭和 29 年には 50 ヘクタールまで拡大されたが以来耕地の転用もはげしく面積的には延び悩みの状態となっている。

## 2. 品質特性

広甘藍はサクセッション及びバンコーダーで大正初期広町玉木伊之吉を中心に品種改良したもので、葉は濃緑で光沢が強くやや縮緬を有し葉型は・・・(後略)

このように記述され明治中期には広村で栽培されていたと結論つけている。これは昭和 26 年度から足掛け 6 年間に及ぶ生産者本人との会議等で直接の聞き取り調査の結果、沿革を記述する吏員も内容に確信が持てる状況を得たことにより「不詳であるがとか、明治中期頃」という文言をはずしたのであろう。

この沿革の中で筆者が目にしたのは

- A. 広甘藍の栽培起源は明治中期
- B. 明治 37 年頃には既に相当栽培されていて多量に生産されていた
- C. 当時農家は自ら広島天満町市場に出荷していた

(注：広村東大川河口と広島舟入間は当時番船の定期便があり、甘藍は船便でそのまま天満川を溯り天満町市場に搬入可能であった)

以上この 3 点が小栗康治氏の論説に附記されるべき内容である。よってこの 3 点に付いて行った裏付け調査を以下で報告する。

## 広島県立文書館相談員の回答

同館西村晃氏の返答は、「広島市は原爆により戦前の中心部の記録がほとんど残されていないため、広から甘藍が明治 20～40 年に広島市天満町市場に出荷されていた資料を広島側から見つけるのは困難です。」といわれ「まず当館には天満町市場の資料はありません。」ということであった。

さらに広島市公文書館へ問い合わせ下さったが『広島市統計年表』は「明治 30 年代のものは所蔵していません」ということであつた。

次に『広島県勸業年報』を見ると食用農産物の生産統計に甘藍の項目が現れるのは明治 41 年からで、それ以前は生産・移出入ともに甘藍の記載はなく、明治 41、42 年の賀茂郡の生産は「一」(なし)となっており、対し明治 41、42 年の広島市では、数反の作付けと 5,000 貫程度の生産が確認できる。明治 43 年には、賀茂郡及び広島市で以下のように生産されていた。

「  
賀茂郡 作付反別 48 反、収穫高 24,020 貫、  
価格 2,402 円

広島市 作付反別 10 反、収穫高 5,000 貫、  
価格 500 円

以上、広島県では明治 42 年以前の、賀茂郡における甘藍の生産、移出入に関する情報を補足していないようです。」と連絡頂いた。

さらに多方面への調査をして頂いたが最後に「賀茂郡志」p151 に大正元年の物産統計表の記載が有り、広村の「甘藍」の収穫高は 2,500 貫、200 円とある。といわれる。

また同館と同じように呉市史編纂室の係

員も「旧呉市市場への移入記録で戦前のものは空襲のため呉市は市街地・呉市役所などがほぼ全焼しているため残っていない」ということであった。

このように甘藍生産資料は明治後期を遡ることができず『広甘藍一件綴』記載の「明治中期、既に多量に生産されていた」という裏付け情報を得ることはできなかった。

しかし資料の中でも個人出荷は（統計から）除く。また少量出荷の場合は組合規定を適用しないという文言が附記されているため、広村の生産記録（統計表）に記載されなかったということを広島市側の移入記録から証明したかったが現存する資料がなく明治中期（明治22年～同37年）まで遡ることが出来なかった。

それでは何故『広甘藍一件綴』に生産は明治中期と記載されたのか。まさに謎であるが、この謎に以下で迫ってみたい。

#### 県立図書館相談員の回答

同館松井女史の回答では「広甘藍の天満町市場へ出荷記録が分かる資料は、当館では見付かりませんでした。」といわれ多くの調査済み資料をご教示頂けた。

ただこの中で『近代日本都市近郊農業史』渡辺善次郎著・論創社・1991年、p100～124 西洋野菜の導入と普及。p106に「こうした各種の試作野菜品種は各府県にさかんに配布された。その初期頃の状況を見ると次のようになっている。」との一文に続き「年別、配布先府県名（配布された）蔬菜」の一覧があり、明治7年に「広島県、甘藍・大茄子・蕃茄・玉蜀菜」とある。と知らされた。

この記述を信じれば県下には明治7年に

甘藍の種が配布されたことになる。県下のどこで試験栽培されたかは全くの謎であるが興味深い記述である。

この配布された甘藍の種を使って広村で明治中期には甘藍栽培が行われたといっても信頼されないと思うので次の資料を紹介したい。

#### 広村役場文書と矢口家口碑

広村の場合は空襲で第十一海軍航空廠ほか軍需施設はほぼ壊滅したが、市街地住宅5,000棟の内、100余棟程度が破壊・焼失したが、幸いにも戦後まで旧広村役場（呉市広支所）は戦災を免れ多くの近世文書・明治期行政文書が残っている。

この中に『明治三十三年・海外渡航移民名簿・廣村』が残っておりこの記載に明治中期から同33年までにハワイ・北米合衆国・カラフト・ロシア西シベリア・豪州へ渡航移民した方の名簿があり、19名の姓名・生年月日・住所が記載されている。

（注2）

広村大新開矢口家では明治8年2月7日生まれの矢口亥之吉が北米合衆国へ出稼ぎ移民してカルホルニア州ロサンゼルス郡でメキシコ人を使って大規模な農園を営んでいたと（同人直系の孫によって）伝承されている。

この伝承は広村役場文書『海外渡航移民名簿』の記載からもおよそ説明できる。この名簿によると矢口亥之吉は「海外渡航株式会社」などの移民仲介業者の斡旋を受けず個人（自由な立場）で明治30年6月28日、北米合衆国ビクトリアへ渡っている。その後同国カルホルニア・ソノマフオーレストビルへ移動してこの地で、一緒に農園

を経営するため、翌年の明治31年2月19日、弟・矢口勇吉（明治10年10月16日生）を呼び寄せている。

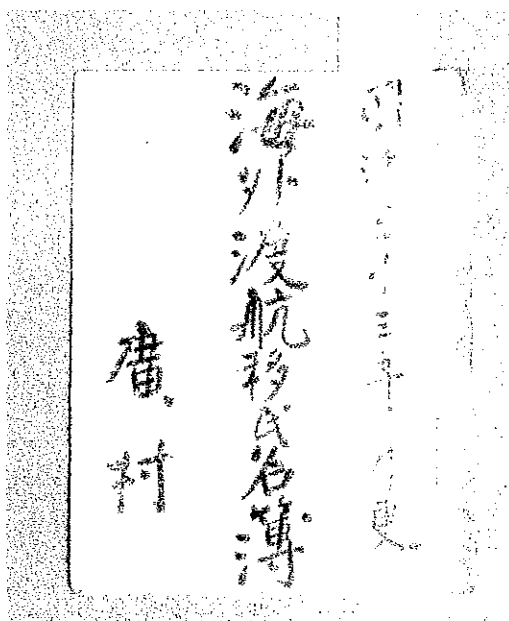
その後、カルホルニア州ロサンゼルス郡・ガーデンア街で3名の子供の出生届を広村役場に提出しており、この場所が大規模農園を最終的に経営した場所と考えられる。

数年後弟・矢口勇吉は同地に妻を迎えるがその翌年不幸にも病没している。

矢口亥之吉も一時帰国した折り実家で妻を迎えて一緒に米国へ渡った。

農園はメキシコ人を使って順調に経営されたが日米開戦の直前、妻子を伴って帰国した。亥之吉は戦後、昭和30年広村大新開の実家で亡くなる。3名の子供の内1名（男性）は戦後再び米国へ渡ったが、2名（女性）は広の地で婚礼し現在は孫数名が広に在住している。口碑はこの方々の証言によるものである。

では何故大新開でも大きな農業経営を行っていた矢口家の子供が米国へ渡る決心をしたのかその理由を以下で述べる。



広村役場文書『海外渡航移民名簿』（注2資料）

### 明治17年の台風（津波）被害

この年の8月25日、広村は過去経験したことのない台風被害を受ける。築調以来200年間その原型を保っていた大新開が7尺（約2m）の津波に襲われ破壊・水没した。現在でいう台風による高潮であるが、広村の平地は台風が去った後、3尺（約1m）の潮水に浸かり作物が全て枯れこの年は収穫出来なかった。その後も塩害により永く作付けが出来ない状況がつづき矢口亥之吉は明治18年、広尋常小学校を4年で卒業すると実家の農業を手伝わず屋根職人になる。大新開では農業が出来る状況になかったためである。

しかし屋根職人は高い所に登り危険が伴うので結局、明治30年米国へ出稼ぎ移民として渡ったのである。実家の後押しを受け、その後兄弟2人は米国で農園経営を成功させた。

亥之吉が米国へ渡る折りのエピソードがある。米国へ渡る船の中で白人専用のトイレで小用をして外へ出ようとした折り、1人の欧米人が本人にクレームを付てきた。うるさいので拳骨を右顎にポインと一発入れてやったという。そうすると顎が外れて「ふがふが」と声が出なくなった。そこで反対からもう一度拳骨を入れるとその拍子に顎が元通りに治ったらしい。同氏の白人を恐れぬ武勇伝はこれから米国へ渡って成功しようとする気概を感じる。

（同人孫の証言）

亥之吉は米国へ渡ってカルホルニアで栽培されていたキャベツ（サクセッション）を見て塩害に苦しむ広村の助けになると思ひ実家へ仕送りの現金と一緒に種を送った。

広村の実家では柵内田（自作田）でこれ

を栽培した。この証言が正しければ、明治中期、広村で栽培され広島市天満町市場に個人で出荷していた市場価値の低いと形容される初期の甘藍と推測できる。

また、矢口亥之吉も『広甘藍一件綴』作成時まで広大新開で生存していた。

同時に同資料の品質特性に広甘藍はサクセション及びバンコーダーと述べられ亥之吉が米国から送ったとされる種もサクセションと伝えられ推測の補強材料になる。

最後に明治 17 年の台風被害とはどのようなものであったか検証しておきたい。

### 明治 17 年 津波被害の詳細

#### 明治 17 年の津波（高潮）で水没した新開面積の検証

##### 広村新開築調

（呉市史資料編近世Ⅱに掲載された広村開発新開）

その他の新開

地誌年	新開名	面積（反） 町反. 畝歩	石高 石	
慶長年間（1595）	切畠新開	61.622	21.31	
寛永年間（1624）			面積未記載	東新開（現・中新開）
寛永 3 年（1626）	古新開	13.008	7.886	
寛永 9 年（1632）	古新開	8.918	5.676	
慶安 2 年（1649）	古新開	314.912	349.241	
万治 3 年（1669）	三拾石新開	30.918	31.008	
寛文 13 年（1673）	福浦新開	2.803	2.248	
元禄 13 年（1700）	大新開	1108.803	1087.205	
寛延 3 年（1750）	四新開	58.112	35.964	
天明 2 年（1782）	大新開連々作	71.618	47.715	
文化 9 年（1812）	仙兵衛新開他	95.615	53.932	
築調年				
文化 3 年（1806）	武兵衛新開	94.800		
文化 6 年（1809）	津久茂新開	70.000		
	中洲新開	39.000		
文化 8 年（1811）	弥生新開	389.427		
		146.105		文化新開
		215.319		多賀谷新開



15.920 横路新開  
面積未記載 大広新開

末広新開 123.500

江戸時代以前築調 門松新開・徳丸新開・三本松新開・古浜新開・しやけ（塩焼）

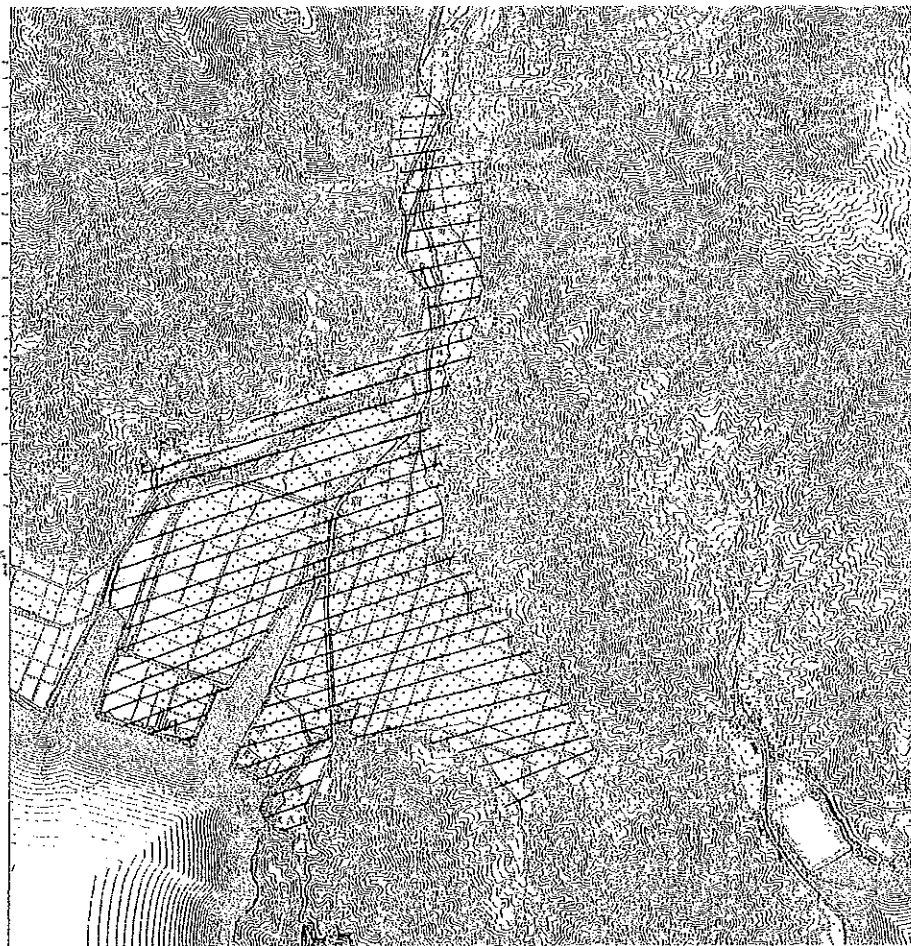
合計新開総反数 2860.398 反歩（面積判明合計）

約 286 町歩

広村新開全町歩（面積判明分）を合計すると上記のとおりである。

この他、筋違橋北江戸期以前で町歩不明の古浜新開・門松新開・徳丸新開・三本松新開・町田新開・鹿田新開・しやけ・と面積未記載分計約 100 町歩を合計して、400 町歩になる。

明治 30 年測量の広村地図



平地で斜線を入れた場所が広村を 7 尺の高潮が襲った区域。その後深さ 3 尺の海になった。

石内隧道西側古浜新開から黒瀬川河口付近の平地の耕地全ての合計 400 町歩である。

広西大川の西側阿賀村の小倉新開（上）豊栄新開（下）もこの台風で海水に浸かった。

『藤田家文書』D章の台風被害。

明治17年の津波（7尺の高潮）にて高さ3尺（約1m）の海水に水没した面積400町歩とは広村全開の全てが3尺の海水に浸かり、この広さは黒瀬川河口の石内芳ヶ淵隧道直下以南平坦地の耕作田畠全てであったことが理解できる。

海水に浸かった田地（耕作地）が海底同様の状態になったと形容される状況とは、農地が全て干潟の砂浜状態に陥ったと考えなければいけない。

『藤田家文書（D-1・10/13～11/13）』

（注3）にて大被害の状況が記録されているとおりであるが、『同文書（A-6・2/5）』に記録されているように、

「一、明治十七年七月（旧暦）同郡同村（賀茂郡広村）末広新開・大新開・弥生新開・大広新開・多賀谷新開堤崩潰同時より起工、明治十八年六月竣工。

一、明治十八年民庶飢に迫るもの多きが故に倉穀を出して之を賑わす。」（注4）

とあり、丸一年間かけた大工事であったことと収穫前の災害で「新開作物悉く枯れる」とあるように明治17年は作物の収穫が無く、翌年は米の作付けが出来ず丸2年間収穫はほぼ皆無の状況で、それゆえ広村民に餓えが迫ったのである。

つぎに『膺懲碑』の記録では「新開の家屋の壁が瞬時に崩れ全うする（流されなかった）家はなかった」と記載され「数百町の田畠はいたずらに鹹鹵（かんろ）となし永く公益を損せん」とある。鹹鹵とは土地に潮が含まれる状態を指す言葉で塩害により永く作物が実らなかったとことを物語っている。

まさに同碑の「桑田変じて海と為る」の形容そのもので、天地がひっくり返ったような大災害であったのである。

#### ま と め と し て

広村で明治中期甘藍栽培記録の裏付けを広島市側の移入記録などを調査したが結局、戦災など歴史の壁に阻まれ見いだすことができなかった。だからといって記述された資料の信憑性に疑を挟むことはできないと考え、明治中期に甘藍が栽培されていなかったとは言い切れない。

というのも『広島県農會報第68号（明治34年刊）』にはすでに甘藍栽培方法が詳しく記されているからである。（注5）

ではなぜ広村の生産統計に載らなかったか、広町蔬菜出荷組合（昭和25年設立）では個人消費・個人出荷は（統計から）省くと記述されており「明治中期、相当栽培され多量に生産されていた」とされながら明治40年以前の広村蔬菜生産統計表に記録されていないのは、個人の自由出荷であったためと考えられる。

また海軍史研究家では、呉鎮守府・呉海軍工廠・（常備・連合）艦隊の兵員・工員への生鮮食料を主に賄ったのは広村の農産物であり、軍需部と農家の取引がされていたが、空襲や終戦時の処分命令（軍関係書類）によりこれら関連書類は残されていない。そのために呉市（海軍関係）への甘藍移入記録が残らなかったと考えるべきであるがはたしてこの推測が正しいか、今後の研究資料の発掘に期待したい。

最後に明治17年の台風被害を契機に広村戸長役場は破綻状態となり広島県一の難村と揶揄されたが明治20年、藤田譲夫が広



注4：『藤田家文書』（A-6）。「広郷土史研究会会報」第77号・p10の『藤田家文書』（A-6・2/5）に原文記載。これまで『膺懲碑』の碑文に「遂に其の工を竣る実に其の十一月九日（明治17年）なり」とあるが、これは仮復旧と見られ、竣工を見たのは同文書の「翌年6月（明治18年）竣工」の日限が正しいと判断する。

注5：『広島県農會報・第六十八号』（広島県農會・明治34年2月発行）p42に甘藍の詳しい栽培方法が述べられ、1反当たり120円の収入がえられると記されている。玉木伊之吉の品種改良を10年も溯る。広村で甘藍の栽培起源は明治中期という『甘藍栽培一件綴』の微証となり、伊之吉以前に広村で甘藍の栽培があった事を示唆するものである。

（書籍検索 No.042867-000-4・特 54-633・広島県農會報・広島県農會・M34,BDJ-0590）

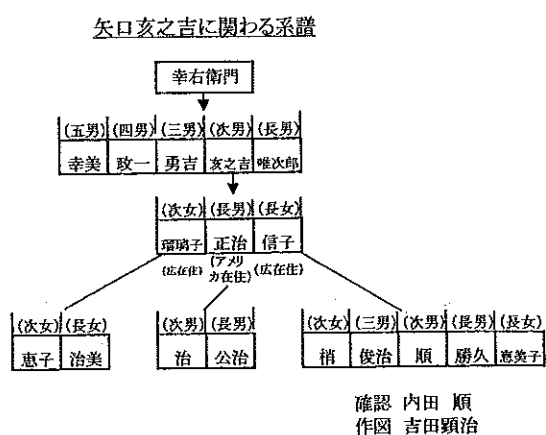
注6：『自治研究資料・広村視察記集』（明治43年11月28日発行・編集発行者、正藤堇一）大阪天王寺師範学校長・村田宇一郎「天下の名村広村參觀記」、内務省地方局長・床次竹次郎「奨励金壹千圓を授与されたる模範村」、愛知県農會技師・山田太郎「模範村広村を訪ふ」、自治協會幹事・長澤則彦「自治と宗教」の4名の学者が広村を訪れ模範村になった経緯を探った論文集。このp40に呉港（呉市）に「広村で栽培した蔬菜を搬出し人糞を輸入し、一反歩から参百円の収入を得る」とある。このように呉市に海軍鎮守府と海軍工廠ができ、人口の増加で広村の蔬菜が大量に販売出来たことが模範村につながったと記されている。

附記：『広村』（大正4年12月21日発行・武岡充忠著、株式会社警眼社）この著は大正の始め広村役場吏員の協力の下、役場資料を提供して執筆された広村史ともいべき書物で広村近代史研究には欠かせない書物と云われる。p629の大書であるがこの中に拙論を補強する論説があるので示して置きたい。

p364に「蔬菜の生産、大正3年、総額9万円。この内呉市に輸出されるもののみで6万円を超えるに至り」とあり蔬菜生産に適した広村新開農耕地で栽培される蔬菜の主部分は呉市内に販売されていた。

p429に「明治十七年の堤防破壊の如きは被害の程度最も大にして復旧工事費実に10,611圓を要する」とあり、この水害が村史以来一番の大災害であったことを示している。

資料：矢口亥之吉孫までの系譜と口碑証言者名簿



米国サクセッションの種を送って来た  
と積極的に唱えていたのは矢口幸美の息子、一美（亥之吉の甥）であるが数年前に没した。亥之吉の直系の孫数名が生存するが、既に90才を超えた者は没しており、若い孫は小さい時に聞いた事を覚えていない。数名がこの貴重な伝承を継承してきたが、歴史の闇に消えて行く口碑をここに記録し残しておきたい。

明治中期(明治22年～37年)の広村における甘藍栽培関連年表

元号	西暦	出来事	参考文献
明治7年	1874	政府は全国に西洋蔬菜の種子を配布(広島県に甘藍の種を配布)	「近代日本都市近郊農業史」
明治17年	1884	8月25日台風被害で堤防決壊、広村全新開400町歩が3尺の海になる。この年の作物は台風で収穫できず。	「広郷土史研究会会報第82号」「藤田家文書」
明治18年	1885	6月堤防の復旧工事竣工なる。この年も米の作付けは不能。民庶飢えに苦しむもの多く(石内地区)倉穀をだす。明治17年の台風被害以降、広村戸長役場の財政は破綻状態となり県内一の難村と評される。	「同会報第77号」「藤田家文書」
明治20年	1887	藤田謙夫広村戸長に就任。借金返済に全力を傾ける一方、村民に統計による状況説明を行い理解を深める。	「広村」
明治27年	1894	広村ではこの頃から甘藍は相当生産されていた。	「広甘藍一件綴」
明治28年	1895	しかし品質は欠点多く市場価値は低かった。	
明治30年	1897	6月28日、矢口亥之吉北米合衆国ビクトリアへ自由渡航。	「海外渡航移民名簿」
明治31年	1898	2月19日、矢口勇吉カルホルニアへ自由渡航。	「海外渡航移民名簿」
明治34年	1901	広島県農会報68号が甘藍の詳しい栽培方法を発表する。	「広島県農会報68号」
明治37年	1904	日露戦争当時甘藍は相当栽培され多量に生産されていた。当時農家は自ら広島市天満町市場に出荷していた。	「広甘藍一件綴」
明治43年	1910	内務省より模範村表彰を受ける。	「広村」
大正3年	1914	玉木伊之吉「広園芸出荷組合」を設立(甘藍品種改良に成功)。	「広甘藍一件綴」
昭和初期	1926?	甘藍の名称を「広島甘藍」から「広甘藍」に改称。	「広甘藍一件綴」
昭和16年	1938	太平洋戦争(日米開戦)。	
昭和21年	1946	甘藍栽培面積…約3町歩 玉木伊之吉の「広園芸出荷組合」は解散に至る。	「広甘藍一件綴」
昭和24年	1949	甘藍栽培面積…約10町歩 生産量…10万貫	「広甘藍一件綴」
昭和25年	1950	甘藍栽培面積…約15町歩 生産量…15万貫 「呉市蔬菜出荷組合」が山本廣により新設される。 この年から京阪神への出荷が開始される。	「広甘藍一件綴」
昭和26年	1951	甘藍栽培面積…約25町歩 生産量…25万貫 この年京阪神への市場視察を行う。 広島県と呉市から支援と指導を受ける。 呉市の支援は農林水産課に「広甘藍」復活の為に事務局を設置。	「広甘藍一件綴」
昭和27年	1952	甘藍栽培面積…約30町歩 生産量…30万貫 京阪神への多量出荷を実現。	「広甘藍一件綴」
昭和28年	1953	甘藍栽培面積…約38町歩 生産量…38万貫	「広甘藍一件綴」
昭和29年	1954	甘藍栽培面積…約50町歩 生産量…50万貫 この年県費の補助を受ける。	「広甘藍一件綴」
昭和30年	1955	県費の補助と県農業試験場可部園芸支場長松田栄氏の協力を受け「広甘藍」増産の5ヵ年計画を策定する。 (呉市内100町歩・隣接町村100町歩の計200町歩を目指した)	「広甘藍一件綴」
昭和31年	1956	「広甘藍一件綴」の記載最終年となる。甘藍増産計画破綻。 農地から住宅地への転用が進み栽培耕地が大幅に減少したか？ 農地の売却で農業意欲が減退したか？	「広甘藍一件綴」

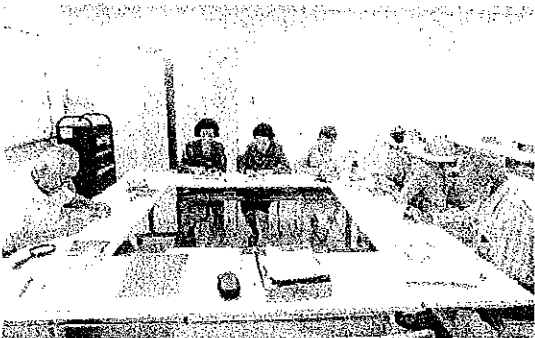
### 古文書部会の報告

さる6月22日(日)古文書部会で『藤田家文書』の解読作業を行いました。現在は同文書のFJ章の最終解読を行っております。

一段落したら同文書の読み下しを「藤田家文書第1巻」として発刊予定ですが解読に手間取り足踏みしております。

『藤田家文書』は明治期の広村を知る大事な手掛かりとして役立つ文書です。発刊までもうしばらくかかりますがご期待下さい。

当日の出席者は小栗康治・上河内良平・藤堂美智子・鈴木千鶴子・中向井純子・寺川栄子・大倉正明の7名でした。



古文書解読作業風景(写真上河内)

次頁に県下の歴史講座開催案内を掲載しています。参考にして下さい。

### 例会の主な感想

広の町は土地柄海産物が賑わっていたと思いますが田畑の産品も富んでいたのですね。

玉木翁の苦心で「扁平球」になった話は面白く、もう一つ戦役時に「軍資献納者」がかなりの人員・金額にのぼった話も気に入りました。

石井 和美

伝承を関連記録・資料を集め調査し裏付けた立証でした。

実体が明確になった。

在野の実業家の活動と学行の研究が町興しの原点であると教えていただいた。

ありがとうございました。

私も甘藍栽培と農地干拓の関連を調べて見たいと思います。

山本 昭光

資料の大切さを改めて考えさせられました。日記を処分する積もりでございましたが、幾分かは子孫の為に残したい気持ちになりました。

福本 健

玉木伊之吉の曾孫です。

広郷土史研究会の見解として広まちづくり推進協議会の「広甘藍」の歴史を正して下さい。

山中 ひろみ

玉木伊之吉の曾孫です。

インターネットで「広甘藍」を検索すると台風の被害を広甘藍が救ったという大ストーリーが必ず出てきます。

今日は資料に基づく事実が発表され良かったです。歴史を発表するには資料が大切なのだということがよくわかりました。

小林 いづみ

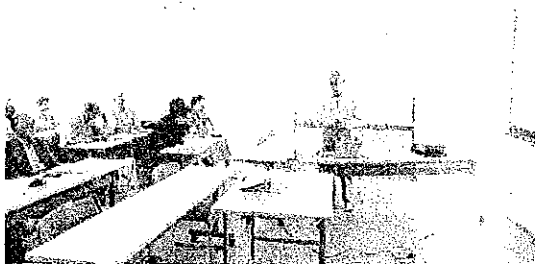
### 例会報告

さる平成26年5月23日(日)当会の小栗康治会長に「郷土が誇る人物評伝・玉木伊之吉・広甘藍生みの親」と題して講演を戴きました。

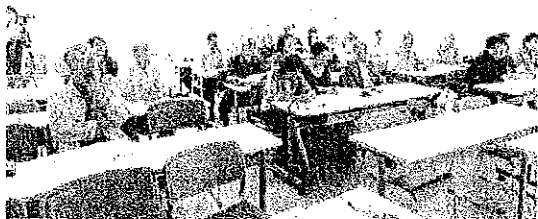
広甘藍は広村蔬菜の代表格として大正末期には200町歩を超える新開の田畑で栽培され200万貫を超える生産高を誇り近畿・東京・九州はもちろん遠く満州まで出荷される盛況振りでした。

今回は玉木伊之吉の活躍にスポットをあてたお話しでした。

なお、当日出席者名簿を提出された方は、小栗康治・上河内良平・平原聖三・重盛親聖・鈴木千鶴子・中向井純子・大野翠・石井和美・山本昭光・鈴木恵子・田中義則・木村興一・福本健・大倉正明・内田其一・木元幹雄・石本章司・畑中省三・山中郁也・山中悠也・玉木冷子・山中ひろみ・濱本美智子・小林いづみ・山中靖彦・吉田顕治ほか8名の合計34名でした。



当日講演される小栗康治会長



当日会場の聴講者

### 第113回

#### 例会のお知らせ

期日：平成26年7月27日(日)

開演：午前10時～午後5時まで

場所：広まちづくりセンター

第502号室 大会議室

#### 2014年度芸備地方史研究会大会

##### 広郷土史研究会共催

午前：研究発表3件

午後：シンポジウム

##### 戦前の広島における洋楽の普及

研究発表とシンポジウムは当会報p2・p3を参照下さい。

広島県地域の郷土史の最先端研究を聴講する事が出来る機会です。

シンポジウムは広島大学博士課程の研究者など4名の方から最新情報を広島大学文書館石田雅春助教の司会によって詳しく紹介されます。

エリザベト音楽大学片桐功教授がコメンテーターを勤められ呉鎮守府と明治期の先進音楽のお話しが楽しく聴講できます。

この機会を逃さず振るって参集下さい。

### 古文書部会のご案内

期日：平成26年8月24日(日)

時間：午後2時～午後4時頃まで

場所：広まちづくりセンター

第601号室 小会議室

「藤田家文書」の解読作業を行います。